

# 後漢書列伝六十一朱儁伝訳稿

狩 野 直 禎

## 一 はじめに

朱儁は後漢末に活躍した人物であり、特に皇甫嵩と並んで、黄巾の乱の平定には中心人物として活躍をした。

一方、後ちに三国の魏・蜀を建国する曹操・劉備、及び呉の初代皇帝孫権の父親孫堅もこの黄巾の乱平定に、かかわっていた事は、周知の通りである。

黄巾の乱平定に主役として活躍した皇甫嵩・朱儁が、何故次の時代を作る人物となり得なかったのか、乱平定には極めて限られた役割しかはたさなかった曹操らが、三国六朝とつづく新しい時代を切り拓き得たのかについて関心を抱いた。

本稿はその基礎となる朱儁伝の訳注作成に終始したので、十分な結論は得ていないが、朱儁について言えば、後漢王室を絶対視する視点から抜け出られなかったところに原因があるのではないかと思われる。

## 二 少、青年時代

朱儁は、字は公偉といい、会稽上虞（浙江省上虞）の人である。少

い時に父を亡くし、母がいつも絹織物売って、仕事としていた。

案ずるに、儁の母が主人亡き後、絹織物売って生活のたつきとしていた事はあたかも蜀漢国の先主劉備の母が、夫の死後、履を売り席を織って生業としたのと、同じ事情であった。なにも此の時代に限った事ではなからうが、未亡人が子供を抱えて、生活をするためには、此の様な事が通常であったのであろう。

儁は親孝行で有名となり、県の下書佐となった。義を好み財を軽んじたので、郷里のものは、これを敬まった。

案ずるに、「孝」「義を好む」「財を軽んずる」と言った事は、当時の人たちの賞讃する行為であった。此の事は改めて説くまでもない事ではあろうが附記する。

時に同郡の周規が、三公の府に辟召された。洛陽に出発するにあたり、郡の会計の庫から銭百万を借りて衣裳代としたが、後になってねわかに督促された。規の家は貧しくて、借りた銭を返却する備えがなかった。

案ずるに、三公の府に辟召された場合には、衣裳代という名目で、金銭が必要であつたらしい。三公の府に辟召される事は名譽ではあるが、同時に莫大な出費も伴う事になる。或いは公府辟召の制が始められた時には、なかった事かも知れないが、後漢末には極めて普通の事でもあったのであろう。そしてその出費を補うために、任官後に、種々な形で蓄財を行った

事は想像に難くない。百万銭というのは個人が用意するにはあまりにも多額と見られるからである。

なお返還を求められた際、規と郡の役人との間に、言葉の上での行き違いが起こったようである事、後段の文章より推測される。

偽はそこで母の商売用の絹織物を窃んで、規のために弁償してやった。

案ずるに、原文には「規のために解対す」とあり、「規はうけこたえ（＝占対）を記録されていたので、偽は「規の」ために銭を用意して、その事件を解決した」と李賢の注が加えられている。

母は財産がなくなってしまったので、深く怒り、偽を責めた。偽が言った。「小さな損失は大きな利益にあたるのだ。初めは貧乏でも後には富豪になるのが必然の理だ」と。

### 三 郡吏時代

本県（上虞）の長で、山陽郡出身の度尚は偽に会って、彼をめずらしい奴だとし、会稽郡の太守の章毅に推薦したので、偽は郡の役職を歴任することになった。

案ずるに、『後漢書』卷三八、列伝二八の度尚伝注引『謝承書』によれば、度尚は上虞長に赴任し、偽を門下書佐に抜擢したが、偽の人柄に感嘆し、「不凡の操」ありとしたと見える。

なお尚は上虞長から文安（河北省文安）の令に移り、延熹五（一六二）年におこった長沙・零陵の賊の平定に活躍したのであるから、偽が門下書佐に抜擢された時期も、延熹五年を去ること遠からぬ、一五〇年代後半の事と推測される。

後に、会稽太守の尹端は偽を主簿とした。

案ずるに、会稽太守の章毅が何時、此の地を去り、尹端が何時、会稽太守に任じられたのかはつきりしない。ところで、後漢書卷七、桓帝紀に

「延熹九（一六六）年、陳留太守章毅が賊に坐して自殺した」という記事がある。この陳留太守章毅が会稽太守であった章毅と、同一人物であった可能性は高いであろう。この事については、藤田至善編『後漢書語彙集成』（一九六一、京都大学人文科学研究所）は同一人物として扱っているが、李裕民編『後漢書人名索引』（一九七九、中華書局）には、桓帝紀に見える章毅と、朱儗伝に見える章毅とを別人として扱っており、しかも朱儗伝に見える章毅を靈帝時代（一六七～一八九）の会稽太守と明言している。或いは李氏の言うように、別人かも知れぬが、一まずは藤田氏の扱われたように同一人物と考えておく。

熹平二（一七三）年、端は賊の許昭を討って失敗し、負けてしまったので、『揚』州の刺史から奏上されて棄市（死刑）の罪を受ける事になった。

案ずるに、許昭については、『後漢書』卷八靈帝紀、熹平元（一七二）年、十一月の条に「十一月、会稽の人許生が自ら越王と称して、郡県を寇した」とあり、注引の『東觀記』には、「会稽の許昭が衆を聚めて自ら大將軍と称し、父の許生を立てて越王となし、郡県を攻め破った」とある。同じ記載は『後漢書』志十二「天文志」にも見える。又同書卷六八、伝五八 臧洪の伝には、許昭を妖賊として扱い、「会稽の妖賊許昭が、兵を句章（浙江省慈谿）に起こし、自ら大將軍と称し、その父許生を立てて越王となし、城邑を攻め破り、衆は万をもつて数えた」と記す。結局此の乱は尹端の失敗はあったが、臧洪の父、旻によって平定されたのであった。

また、此の乱の平定には、孫堅も一と役を買っていたようで、『三国志』呉志卷一、孫破虜伝には、孫堅が十七歳（一七三年、熹平元年）の時、父とともに海賊胡王を平定し、呉郡の仮尉に任命された記事に続いて、「会稽の妖賊許昌が句章に起ち上って、自ら陽明皇帝と称した。其の子許韶とともに諸県を煽動し、衆は万をもつて数えた。堅は郡の司馬として、精銳で勇敢なものを召し、千余人を得た。州・郡の兵と合体して討ち、これを破った。この年は熹平元年であった」と見える。賊の諱が昭と昌となって文字は違うが、乱の起った年も熹平元年と同じであるから、同一人物とみてよいであろう。果して裴松之は「靈帝紀に言っている、昌はその父を越

王とした」と注しており、許昌と許昭同一人物であることは疑いないであろう。

許昭の乱はこのようにして平定されたのだが、最初、昭が乱を起こした時、失敗をした尹端はどうなったか。朱儁伝の口語訳を続けている。

儁はそこで粗末な衣服をまとい、間道を行き、数百金をもって京師に行き、所管の役人に賄賂を送り、州から中央に送られて来た上奏文を訂正させる事に成功した。それで端は左校に輪作される（流刑）に止まった。しかも端は罪が軽くなった事を喜んだものの、その理由は分らなかったし、儁もまたついにその事を端に言う事はなかった。

案ずるに当時も官界が腐敗していた事がよく分かる。公正であるべき裁判が、或るいは役人の処分が、金銭によって左右されていた。それにしても、数百金というのは、かつての周規のための費用に対し、較べようもない大金である。儁はこれをどのようにして工面したのであろうか。もし私財を投じたとすれば、彼が財を軽んずると評される理由も、ここらあたりにあるのだろう。

#### 四 交趾刺史時代

後に太守の徐珪が儁を孝廉に推挙し、再遷して蘭陵（山東省嶧）の令に任命された。

案ずるに、儁が郡の下級官吏として、使われていた時に、少くとも三人の太守が交替したことになる。そして孝廉として中央に推薦されて、彼は当時の慣例通り、蘭陵県の令となった。

儁は人に比べて、政治に対してのすぐれた才能を持っていたので、やがて蘭陵県の属していた東海国の相によって中央に報告された。

たまたま交趾で賊達が並び起こるが、この地方の刺史や太守たちは

軟弱で、これを防ぐ事ができなかった。また交趾の賊梁龍ら万余人が、南海郡の太守孔芝とともにそむき、郡県を攻め破った。

光和元（一七八）年、すなわち朱儁を交趾の刺史に任命した。

案ずるに、靈帝紀には「光和元年、春正月に、合浦・交趾の烏潯蠻が叛き、九真・日南の諸郡の民を招き引き入れて、郡県を攻め破った」と見える。梁龍との関係はよく分らない。

朝廷は儁に命じ、故郷の会稽郡を通って、家兵を募らせ、その上で、調発した官兵と合わせて、五千人の兵となった。

案ずるに、朱儁は故郷にあっては、家兵を引き連れる勢力までに至っていたのである。此の点も母親に育てられ、裕福でない生活から出発した劉備と似通っている。

儁は二つの道に分れて交州に入る事にした。交州との界に行きつくと、軍隊を引き留めて前進させず、先ず使者を派遣して、敵の拠る郡に入って、陣の備えのある所、無い所を観察させ、自分の軍の威徳を天下に明らかにして、敵の心を震えあがらせた。こうしておいて、交州所属の七郡の官兵と共に進んで賊に逼り、ついに梁龍を斬った。こうして降る者は数万人に及び、一ヶ月足らずで悉く平定した。儁はその功績で都亭侯千五百戸に封ぜられ、金五十斤を賜わり、諫議大夫に徴された。

#### 五 朱儁と黄巾の乱(一) 潁川の賊

紀元一八四年、黄巾の乱が起こるに及んで、中央の大臣達の多くが儁の才略のあることを推薦したので、右中郎將に任ぜられ、節を持って、左中郎將の皇甫嵩とともに、潁川郡・汝南郡・陳国といった、現在の河南省東南部の賊を討ち、ことごとくこれを破った。

案するに、後漢書卷七一、列伝六一の皇甫嵩伝には次のように見える。

「黄巾の乱がおこり、群臣を召して会議したところ、北地郡（陕西省環）の太守であった皇甫嵩は、党錮の禁を解くのがよい事、宮中に蔵われていた錢をどんと出し、また宮中の西園にある馬を放出して、軍中に分けてやるのがよい事などを提案した。霊帝はこれに従った。ここにおいて天下の精銳な兵を発し、ひろく將軍を選び、皇甫嵩を左中郎將として、節を持ち、右中郎將朱儁とともに、五校尉や洛陽中心の三河地方の騎士を發し、精銳なる軍隊を募り、四万余人を得た。嵩と儁がそれぞれ一軍を率いて、ともに潁川の黄巾を討った。

嵩はすすんで賊の波才と戦い、戦争に敗れた。嵩はそこで進んで長社を保った。波才が大衆を引きいて城を囲んだ。嵩の兵は少なく、軍中のものは皆恐れた。そこで嵩は軍吏を召し出して言った。「孫子も言っているように、戦いには不思議な変化というものがあって、数の多寡によって勝敗が定まるものではない。（李賢の注には「孫子兵法曰。凡戦者以正合、以奇勝者也。故善出奇。無窮如天地。無竭如江海。戦勢不過奇正。奇正之變。不可勝也」とある）今、賊は草を使つて陣營を作っている。火事を起こし易いのだ。もし夜に乘じて火を放ったならば、きつと大変驚く事であろう。我が軍がこれに乘じて兵を出して之を討ち、四方から合体すれば、あの戦国時代に斉の田單が挙げた火攻の功績と同じものが成し遂げられようぞ」と。（李賢注、「田單奇將。守即墨城。燕師攻城。田單取牛千頭。衣以五采。束矛盾於其角。繫火於其尾。穿城而出。城上大譟。燕師大敗。事見史記」。其の夕、遂に大風が吹いた。嵩はそこで軍隊に命令して荳を束ねて城壁に登らせ、精銳な兵隊で、ひそかに囲みの外に向かわせ、火を放って大いにときの声を挙げさせ、城壁の上では燎を挙げて之に呼応させた。嵩はそこで鼓を撃って敵陣に走り込ませたので、賊は驚き乱れて逃げ出した。たまたま霊帝の派遣した騎都尉曹操が兵を將いて到着したので、嵩・操は朱儁とともに、兵を合してさらに戦い、大いに之を撃ち破り、斬首数万級に及んだ。（陳寿『三国志』魏志卷一、武帝紀には、「光和末。黄巾起、拜騎都尉。討潁川賊」とあるだけで、皇甫嵩・朱儁、波才と言った語句は一切見えない。）朝廷は嵩を都郷侯に封じた。嵩と儁は勝に乗じて進み、汝南・陳国の黄巾を討ち、波才を陽翟（河南省禹）に追

い、彭脱を西華（河南省西華）に撃つて、並びに之を破ったので、其の他の賊は降服したり、散り散りになったりして、三郡はことごとく平定された。

以上、皇甫嵩伝によれば、波才の賊平定にあたって皇甫嵩の功績が第一であった。にもかかわらず、朱儁伝には次のように見える。

皇甫嵩はそこでその有様を上言し、功を儁の力のせいにしたのである。そこで進んで西郷侯に封せられ、鎮賊中郎將に遷った。

ちなみに皇甫嵩は都郷侯に封じられた。

## 六 朱儁と黄巾の乱(二) 南陽の賊

時に南陽の黄巾、張曼成が兵を起こし「神上使」を称し、衆は十余万、郡守の褚貢を殺し、宛の城下に屯する事、百余日に及んだ。貢の後任の太守の秦頡は撃つて曼成を殺したが、賊はさらに趙弘を大将とし、衆はようやく盛んとなり、ついに十余万に達し、宛城に拠った。

儁は荊州刺史の徐璆及び秦頡と兵を合わせ、一万八千人に及んだ。弘を囲む事、六月より八月に至ったが抜けなかった。役人達は上奏して、儁を呼び返そうとしたが、司空の張温が上疏して申しあげた。

「昔、秦は白起を用い、燕は楽毅を任じ、皆長い年月を過ごして、敵に克つ事が出来ました。（李賢注には『史記』の引用があるが、省略する）儁は潁川を討つて、功績があり、軍隊を引きつれて南に向い、策戦もきちんと設けております。戦争に臨んで將軍を代えるのは、兵家のにくむところです。時間を与えて、その成功を督責されるのがよろしいでしょう」

と。霊帝はそこで召し返すのをやめた。

儁はそこではげしく弘を撃ちこれを斬った。賊の大將となった韓忠が宛で復讐を企てて儁を防いだ。儁は兵が少くかなわなかった。そこで囲みをめぐらし、壘を結び、土山を起こして城内に臨んだ。そこで鼓を鳴らしてその西南を攻めたので、賊はすべての人間を之に赴かせた。儁は自らその精鋭を率いてその東北を攻め、城をよじのぼって入った。忠はそこで退いて小城を守ったが、おそれて降参を申し出た。司馬の張超及び徐璆・秦頡はみなこれを許そうとした。儁が言った。

「兵には形が同じくて、勢が異なるものがある。昔、秦・項羽のころ、民には定まった主が無かった。だからやって来たものには賞を与えて味方にくるようにと勧めたのだ。今は中国は統一され、唯、黄巾だけが賊となっているだけなのだ。投降を許してやっても、善を勧めることにはならないが、これを討てば悪をこらすに十分である。今もし投降を受け入れれば、さらに天下に逆う気持ちをかんとするだけだ。賊は有利だと見れば則ち進み戦うであらうし、不利だと見れば降参を願い出る、敵を許して戦を長期化するのには、良い計略ではない」

と。そこで急ぎ攻め込んで連戦したが勝てなかった。儁は土山に登ると、ふり返って張超に言った。

「私には分っている。賊は今外の囲みは固いが、城内の陣営は急に逼られている、降参を乞うたが受け入れられず、出ようとしてもできない。死にものぐるいで戦う理由である。一万人のものが心を一にすれば、なお当ることができない。まして十万人の場合においておやである。その害は甚しい。囲みを取り払って、兵を合わせて入城するにこしたことはない。忠は囲みが解けたのを見て、勢いとし

て必ず自分から出てくるだろう。出てくれば意志が散漫になる。打ち破り易い方法である」

と。しばらくして囲みが解けた。忠は果して城を出て戦ってきた。儁はそこで撃ち、大いに之を破った。勝に乗じて逃げるのを追いかけること数十里、斬った首は万余級に及んだ。忠たちは遂に降参した。しかし秦頡は忠に対する怒りが積み重なっていたので、ついにこれを殺した。残された衆は懼れて安心せず、また孫夏を大將として、還って宛城中に駐屯した。儁は急にこれを攻めた。夏は逃げた。儁は追いかけて西鄂の精山に至った。又たこれを破った。(李賢の注「西鄂は今の鄧州向城県の南に在り、精山はその南にある。」それは現在の河南省南陽の北にあたる)。復たび万余級を斬り、賊はついに解散した。翌年の春、朝廷は使者を遣わし、節を持し、儁を右車騎將軍に拜し、京師に凱旋し、光禄大夫となり、五千戸を増され、あらためて錢塘侯(浙江省杭州)に封じられ、位を特進に加えられた。

案するに、この度の戦功は前回の皇甫嵩との共同の戦いとは違い、朱儁単独のものと言えよう。ところでここに見られる人物の中、張超は字を子並と言ひ、河間鄭(河北省任丘)の人であり、張良の子孫と見えるが、これは此の時代にはよくあることで疑わしい。『後漢書』巻八十下、列伝七十五下文苑伝に簡単な伝が見える。「文才があり、車騎將軍朱儁に従いて黄巾を征す」とあるから、この宛における黄巾討伐をさす事疑いあるまい。超はこの功によって別部司馬となった。賦・頌・碑文・薦・檄・牋・書・謁文・嘲など十九篇を著わし、同時に草書をよくした。また徐璆は字を孟玉といふ、広陵海西(江蘇省東海)の人である。『後漢書』巻四十八、列伝三十八に伝がある。父の淑は度遼將軍として辺境で有名であった。又李賢注に引く『謝承書』によれば「淑は孟氏易、春秋公羊伝・礼記・周官を習った」とある。さて璆は荊州刺史に遷った時、董太後の姉の子張忠が南陽太守であった。忠は職権を濫用し、もちろん董太后が背後にすることも

あったから、乱脈な行為があり、臧財数億に及び董卓は璆の赴任にあたりに、彼に圧力をかけ、忠の事をよろしく頼んだが、璆は『私は国家のために働くので、いうことは聞けない』と答えた。董卓は怒り、忠をいかに司隸校尉に遷し、今度は忠が璆に圧力をかけた。しかし璆は荊州に致ると、忠の臧錢一億を暴き、大司農に張璠を送りその罪を暴き、あわせて五郡太守及びその属県汚職者を上奏したのである。張璠が殺した褚貢は、おそらく張忠の後任として南陽郡の太守に赴任してきたものであろう。南陽の黄巾平定後も、張忠は璆を怨みに思い、宦官とグルになり、璆の罪をでっちあげ、罪にあてようとしたが、璆には賊を破るの功があったので、官を免ぜられ家に帰ることになった。後又た官界に復活し、袁術が盗み持っていた国璽を獻帝に献上したりしている。

ところで、『三国志』巻四十六、呉志一、孫破虜伝によれば、孫堅が朱儁と行動を共にし、汝・潁の黄巾の平定から宛城に拠つた余賊の平定にまで、協力したと見える。孫堅が熹平元年に会稽の妖賊許昌を平定したことは前に述べたが、その際に功をもって、塩漬（江蘇省塩城）の丞に除せられ、数年にして盱眙（安徽省盱眙）の丞、さらに下邳（江蘇省邳）の丞にと遷っていった。なお裴注引江表伝には「堅歴佐三原、所在有称、吏民親附、郷里知旧、好事少年、往来者常数百人、堅接撫待養、有若子弟焉」とある。中平元年に黄巾の乱が勃発すると、中郎将朱儁は堅を佐軍司馬に任じてもらう様に請い、許された。堅の郷里の少年で、下邳にいたものは皆、従わんことを願った。さて堅は又商旅及び淮・泗地方の精兵を募つて、千人余りを得、儁と力を合わせて奮撃し、堅の向うところ、敵は前進するものがなかった。裴注引呉書では、堅は勝に乗じて深入したが、西華（河南省西華）において利を失い、創を被つて地に仆れ、部下に救い出された話が見える。

それはさておき、陳寿の本文は、汝・潁の賊は苦しみ、走つて宛城を保つたと続く、堅は自身一面に当り、城壁に登つて先登を切つて入り、遂に大いに之を破つた。儁は実状を皇帝に報告したので、堅は別部司馬に拜された。裴注はここに『統漢書』によって儁の略伝を引いているが、黄巾の乱平定に至るまでのところ、特に取りあげるのは記していないが、車騎將軍に任ぜられたという点は、『後漢書』に見えないところである。

## 七 朱儁と黄巾の乱(三) 張燕

母が死んだので、喪に服するため官を去つた。再び起家して将作大匠となり、そして少府・太僕へと転じた。

黄巾の賊の後、復た黑山・黄龍・白波・左校・郭太賢・于氏根・青牛角・張白騎・劉石・左髭・丈八・平漢・大計（九州春秋には大校に作る、李賢注）・司隸・掾哉（九州春秋には縁城に作る、李賢注）・雷公・浮雲・飛燕・白雀・楊鳳・于毒・五鹿・李大目・白繞・畦固・苦咽（九州春秋には苦饅に作る、李賢注）の徒が、並びに山谷の間に起ち上り、その数は数えきれないほどであった。その大きな声を出すものは雷公と称し、白馬に騎るものは張白騎と称し、身軽に動くものは飛燕と言ひ、髭の多いものは于氏根と号した。（李賢注には左伝「于思于思、弃甲復来」に対する杜預注「于思、多須（髭）之貌也」を引いている）大きな目をしたものは大目とした。このように称号にはそれぞれ因る所があるのだ。大きなものは二・三万、小さなものは六・七千であった。

案するに、此れらが黄巾の余賊と呼ばれるものであろう。彼らが山谷に拠つたというのは興味のあるところで、こういった地形の複雑なところが、賊を働くのに都合が良かったのであろう。江東の山越を思わせる。

なおここに挙げられているものの中で、張白騎・劉石・平漢・大計・司隸・掾哉・雷公・浮雲・白雀・楊鳳・于毒・五鹿・白繞・畦固・苦咽の諸集団は『後漢書』においては、この朱儁伝にしか、その名は見えないが、于毒・白繞・畦固等は陳寿『三国志』中に少しく言及する所がある。

賊の総大将は常山（河北省正定）の人張燕で、身軽ですばしこく、勇敢であつたので軍中のものは「飛燕」と呼んでいた。よく兵隊たち

の心をつかんでいた。そこで中山（河北省定）・常山・趙（河北省邯鄲）・上党（山西省長治）・河内（河南省懷慶）の山谷に拠る賊たちと、互いに交通し、その衆は百万になり、黒山賊と号した。黄河の北の諸郡県は並びにその害を被ったが、朝廷は討つことができなかった。燕はそこで使者を出して洛陽に至り、上奏して降らんことを願い出した。

案ずるに、『三国志』卷八、魏志八、二公孫陶四張伝の中、四張の一人が張燕である。今はその全文を紹介するのを省くが、それによると、本の姓は褚であったという、張牛角の部下として活躍し、牛角が戦死した後、仲間に加えられてその部衆を帥い、姓も張と改めた。袁紹が公孫瓚と冀州を争った際には、瓚を助けたと見える。

なおこの張燕伝の裴注引張璠『漢紀』には、左校・郭大宝・左髡丈八が一つのグループをなしていたように記す。

又た案ずるに『三国志』も『後漢書』張燕伝も、燕が人を遣わして、朝廷に降らん事を乞うたと見える。張燕は戦って朝廷の軍に勝つ事ができるのに、敢えて降服を申し出たのは何故であろうか。朝廷に降服する事により、賊ではなくなったという名分を得ようとしたのであろうか。また朝廷としては、各地の豪族達がようやく反朝廷の気持ちの表面に出して来た際であるから、燕の武力を逆に利用して、これら諸勢力に対抗させるメリットがあると判断したのであろう。それを思わせるものとして、対象は張燕ではないが、張燕伝の裴注引『九州春秋』に、「靈帝は黒山等の諸賊を討つ事ができないので、使を遣わして、楊鳳を黒山校尉となし、諸山賊を鎮させた」と見える。朝廷側から働きかけも張燕の場合考えられる。

ついに朝廷は燕を平難中郎将に任命し、河北諸山谷の事を預からせ、毎歳孝廉を挙げ、會計報告のための官吏を派遣する事ができた。

案ずるに、張燕は平難中郎将ではあるが、同時に郡の太守と同じ権限を持つ事になり、事実上は後漢朝公認の半独立状態を作り出したのである。なお前に引用した『九州春秋』では、張鳳が孝廉を挙げ、會計報告のため

の官吏を派遣する事を許された事になっている。

燕は後ち、河内に攻め込んできて、洛陽に近づいた。

案ずるに、張鳳が先に降服を願ひ出たのは、便宜的なものであったから、独立が公認されるや、その勢いを逆に利用して、反旗を翻したものであろうか。たゞしこの事は『三国志』張燕伝には見えない。

ここにおいて、儁を河内太守に任命し、家兵を率いてこれを撃たせた。

案ずるに、朱儁は会稽郡の賊を討伐したのに始まり、黄巾の平定に至るまでの経歴を認められ、このたびも黄巾余賊たる張燕の平定に遣わされた。そして此の時も家兵を率いて出撃した。これは官兵の弱体化、ひいては後漢王朝の衰退を意味するが、朱儁が依然として家兵を保持していた事は、場合によっては反朝廷の立場に立つ可能性を、少くとも武力の面では有していた事を示そう、換言すれば曹操や劉備と同じ道を歩き出している、そう不思議ではない状態にあったともいえよう。

その後、諸賊は多く袁紹によって平定された。その事は袁紹の伝（『後漢書』卷七十四列伝六十四）に見える。

案ずるに袁紹伝では、紹が初平二（一九一）年、冀州牧韓馥からその地位を奪った後、同四年六月に于毒を討ち、さらに左髡丈八、劉石、青牛角、黄龍、左校、郭大宝、李大目、于氏根らを討ち、黒山の賊張燕及び屠各、烏桓らと戦い、両軍ともに戦いに疲れ、退いたとある。ただし『三国志』魏志六、袁紹伝では、陳寿は紹が冀州牧となった経緯は詳述しているが、黄巾余賊との戦いについては、一言も触れていない。何か拠る所があるのであろうか。或いは記すには足りないと判断したのであろうか。裴注に引かれた『英雄記』には、この事が見えるから、范曄は『後漢書』を撰するにあたり、『英雄記』等の資料によって、紹と黄巾余賊との戦いを記したものであろう。

陳寿は『三国志』魏志卷一、武帝紀、初平二年に、曹操が白繞を、翌三年に于毒・眭固・匈奴於夫羅を撃った事を記す。また『資治通鑑』卷六

十、漢紀五十二、初平四年の条は、ほぼ『後漢書』袁紹伝によって記述を進めている。

張燕は『魏志』卷一武帝紀及び『後漢書』卷九獻帝紀によれば、建安十(二〇五)年に至って、ようやく漢朝と言っても、実権は曹操が握っていたのだが、その漢朝に十余万を率いて降服し、列侯に封じられた。また『魏志』卷八、張燕伝には、燕は袁紹と公孫瓚とが冀州を争った時には、瓚を助けて紹と戦って敗れ、次にその袁氏が曹操と戦い、曹操が勝って冀州を定めるに及んで、使を遣わして王師を助けんことを求めて、平北將軍に任ぜられ、安国亭侯、邑五百戸に封じられたと見える。初平四年より、建安十年に至る十三年間、独立を保つ事ができたのは、当時、陝西地方は董卓系の軍閥が卓の死後争い合いを続け、河北では曹操と袁紹及びその遺児が覇を争い、いづれの地方からも、この太行山脈を中にして、東西に広がる地域に拠る張燕に干渉する余裕がなかったからであらうし、張燕も天下の情勢を觀望し、曹操が袁氏をほぼ平定したのをチャンスと見て、降服したものであらう。

以上張燕の歩んだ道をたどって、時間が建安十年ごろまで飛んでしまったが、朱儁伝の本文の訳にもどる。時代はまだ一九〇年のころにあたる。

## 八 朱儁と董卓

復た儁を拜して光禄大夫にし、屯騎〔校尉〕に転じ、ついで城門校尉・河南尹に任命した。そのころは董卓が政治を擅断していたが、卓は儁が宿将という事で、外面はとてこれと親しくしていたが、心の中では、ほんとうの所、これを嫌っていた。

案ずるに、董卓が献帝を擁立したあと、つとめて、人心を収斂するために、いわゆる清流派の流れを汲む人物を採用しようとした。朱儁を重用したのも、そうした董卓の人事方針の一環であつたらう。しかし、一方で董卓が任用したものの中には、都を離れ、地方官に赴任して、反董卓の陣営

に加担するものもでてきた。そのために、董卓が清流派の流れを汲むものに不信任を持つようになった。このことは『後漢書』や『三国志』の董卓伝に見える。すなわち『三国志』卷六、董卓伝には

初卓信任尚書周毖城門校尉伍瓊等用其所举韓馥劉岱孔伉張咨張邈等出宰州郡而瓊等至官皆合兵将以討卓卓聞之以為毖瓊等通情亮已皆斬之とあり、『後漢書』列伝六十二、董卓伝には『三国志』董卓伝より、やゝくわしく述べている。

卓素聞天下同疾閹官誅殺忠良及其在事雖行無道而猶忍性矯情懼用臺士乃任吏部尚書漢陽周毖侍中汝南伍瓊(李賢注英雄記作毖)尚書鄭公業〔李賢注公業名泰余人皆書名范曄父名泰避其諱耳〕長史何顒等以処士荀爽為司空其染党錮者陳紀韓融之徒皆為列卿幽滯之士多所顯拔以尚書韓馥為冀州刺史侍中劉岱為兗州刺史陳留孔伉為兗州刺史潁川張咨為南陽太守卓所親愛並不處顯職但將校而已初平元年瓊等到官与袁紹之徒十余人各與義兵同盟討卓而伍瓊周毖陰為内主

とあり、ついで瓊毖を斬つたのは、次に述べる遷都に反対したためとある。

東方での軍隊の勢いが盛んになった。

案ずるに、袁紹を盟主とした反董卓軍を指すのである。

董卓は懼れて、しばしば公卿會議を開き、長安に都を遷すことを請うたが、儁はこれを止めさせた。

案ずるに、『後漢書』卷七十二、伝六十二董卓伝には、公卿會議を開いた時、長安遷都に反対したのは、太尉黃琬・司徒楊彪であり、又、伍瓊・周毖が固く諫めたとも見える。朱儁の名は見えない。なお、瓊と毖が殺され、彪・琬は恐懼して、卓の所に謝りにいったのであった。

また『三国志』卷六、魏志六董卓伝裴注引『華嶠漢書』には、楊彪と董卓の遷都を廻つての議論を載せ、結果彪が災異にことよせて策免されたこと見える。又同じく裴注引『統漢書』には、太尉黃琬・司徒楊彪・司空荀爽がともに卓の所にいたり、長安遷都について議論し、その結果、卓は彪及び琬の官を免じ、即日、皇帝は長安に赴いたとある。



以上、『後漢書』の朱儁伝を除いては、儁が董卓の長安遷都に反対した事は見えないが、それだから、この事が無かったとは言えない。儁が遷都に反対した事は、これまでの彼の経歴から十分に可能性はあると考える。

卓は儁が自分の意見と異なるのを悪んだ。しかし、儁の名声が重いのを、自分の有利に持って行こうと思い、皇帝に申しあげて太僕に遷し、自分の副となそうとした。使者が儁の所に行くと、儁は辞退して受けようとしなかった。そしてその事にことよせて言った。

「国家が西遷すれば、きっと天下の人達の望みから孤立して、却って山東のもの達（袁紹らを指す）の犯している罪を成功させてしまうであろう。私には西遷に良い事があるとは思はないのです」と。使者がなじって言った。

「君を召し出して、太僕に任命しようと言うのに、君は此れを拒み、遷都の事を問いもしないのに、君は此れを述べる。その理由は何か」と、儁が言った。

「相国（董卓）に副となる事は、臣の耐えられる事ではありません。遷都の計は急ぐ事ではありません、耐えられない事を断わり、急ぎでない事を言うのは、私がそうするのがよいと思ったからです。」

と。使者は

「遷都の事については、あなたの計を聞いていない事にしますから、露見する事ありません、どうか副となる事も御受け下さい」と、儁は

「相国董卓がつぶさに私に遷都の事を説いて下さったので知っているだけです」

と、使者は儁を言い負かす事ができなかったのです、副となす事をやめた。

卓は後に関中に入り、儁を留めて洛陽を守らせた。しかるに儁は山東の諸将と通謀して内応をしたが、すでにして卓から襲われる事を懼れ、官をすてて荊州（劉表）に走った。

卓は弘農の楊懿を河南尹となし、洛陽を守らせた。儁は此れを聞いて、又、兵を進めて洛陽に還り、懿は逃げた。儁は洛陽がすっかり廃墟となり、何も頼りとするものがなかったので、東して中牟に駐屯した。書を州郡に廻して、卓を討つ軍を出す事を請うた。徐州の刺史陶謙は精兵三千を派遣し、他の州郡も少しずつ兵を送って来た。謙はそこで儁を行車騎將軍に上した。董卓は此れを聞くと、その将の李傕・郭汜ら数万人に命じ、洛陽に駐屯し、儁を拒がせた。儁は迎え討ったが、傕・汜に打ち破られた。儁は自ら敵対できない事を知り、関外に留まって又進もうとしなかった。

## 九 朱儁の入関と死

董卓が誅せられるに及び（一九二年）、傕・汜が乱を起こした。儁はその時まで中牟にいた。陶謙は儁が名臣であり、しばしば戦功があったので、大事を委ねる事ができると思い、そこで諸豪傑と共に、儁を推して太師となし、そこで檄文を他の州郡の長官に出して、共に李傕らを討ち、すなわち天子を奉迎しようとした。そこで儁に申しあげた。

「徐州刺史陶謙・前揚州刺史周乾・琅邪相陰德・東海相劉楨・彭城相汲廉・北海相孔融・沛相袁忠・太山太守応劭・汝南太守徐璆・前九江太守服虔・博士鄭玄ら、敢て行車騎將軍河南尹の幕府に申し上げます。国家はすでに董卓の難に遭遇し、重ねて李傕・郭汜の禍にあっております。幼帝はむりやりに執えられ、忠良な臣は害をうけ、長安は他の地方から隔絶されてどのような状態になっているか分かりません。それで官庁の長官や縉紳の有識者は憂い恐れられないものはありません。思いますに、賢明で勇敢な士でなければ、どうして禍乱を収める事ができません。兵を起してから三年、地方はお互いに様子を見合い、いまだ奮い立ち敵を撃った功績がなく、自分のよいようにと争い、猜疑心を抱いています。謙らがお互いに意見を交換し、国難を消してしまおうと議論しましたところ、皆『將軍閣下は文であり、武でもあり、すべての君子は閣下を仰がないものはありません』と申しました。ですからお互いに励まし合い、精悍にして、深く敵地に入れる者を選び、直ちに咸陽を目指しました。多くの食糧を持ち、半年を支えるに十分です。謹しんで心を一つにして閣下におまかせ致します」

と。

案するに、ここに名を連ねたものの中に孔融・応劭・服虔・鄭玄等、儒教の学者が多いのは偶然であろうか。

たまたま李傕が太尉周忠、尚書賈詡の策を用い、傕を召して、朝廷に迎え入れようとした。傕の軍吏達は関中に入るのを憚り、陶謙らに応じようとした。傕が言った。

「論語にも『君主から特別の召し出しがあった時には、馬車の用意

を待たずに出かける』とあるではないか。まして天子のお召しである以上は、すぐに出かけねばならぬ。その上傕や汜はつまらぬ奴で、樊稠はほんくらである。遠い将来を見通す方略を持っていない。又彼らの勢力は相きつこうしている。変難は必ず起こるであろう。自分がその間に乗ずれば大事は成し遂げられる。」

と。ついに謙の議を辞退して、傕の召し出しに応じ、再び太僕となった。謙等はいいに西に進む事をやめてしまった。

初平四（一九三）年、周忠に代って太尉となり、尚書の事を録した。明年秋、日食があったので免ぜられた、復び行驃騎將軍事となり、節を持して関東に鎮する事になった。まだ出発せぬ中に、たまたま李傕が樊稠を殺し、郭汜がまた猜疑心を抱き、傕と攻め合う事になり、長安中が乱れた。それで傕は長安に止まって出て行かず、大司農を拜した。獻帝は傕と太尉楊彪ら十余人に詔して、郭汜を説得して、李傕と和するように命じたが、汜は承知しなかった。遂に傕らを自分の陣営に留めて人質とした。傕はもとより剛直であったので、即日病気になるって死んだ。